

花と文学

日本文学風土学会論集



教育出版センター

昭和五十年十一月五日 初版発行

風土文学叢書 2

花と文学

編著者 日本文学風土学会◎

東京都世田谷区太子堂 昭和女子大学内

(代表) 長 谷 章 久

発行者 柴 崎 芳 夫

印刷所 電算印刷株式会社

発行所 ㈱教育出版センター

東京都豊島区北大塚三十二九一二

郵便番号 一七〇

電話 〇三 (九一七) 八九三〇

振替東京 一四六一二

検印省略

1091-3302-1475

製本・東京美術紙工

クロス・クロス望月

乱丁・落丁はお取替え致します。

序

「花と文学」と題し、ここに日本文学風土学会の研究論集を世に問えることになったのは、われわれの大きな喜びである。日本文学風土学会は、わが国の文学の基本的特質を風土と歴史との関連において闡明すべく去る昭和三八年に設立された。現在全国各地に約二〇〇名の会員を擁し、文芸風土学の名のもとに鋭意研究を進めつつある。

ふり返ってみると、最近の国文学界はまさに百花繚乱の観があり、時代別あるいはジャンル別に組織された学会は、その数ほとんど三〇に近い。各学会での研究活動は、それこそ微に入り細に亘っていて、まことに心強い限りである。しかしながら、こうした研究の細分化、精密化は、一方において国文学の全体像の認識をとかく曖昧なまま残しかねない。それは、テーヌ、ブリュンティエール、ランソン、ザウアー、ナードラー等今世紀初頭に不朽の業績を残した人々と肩を並べるに足る「文学史家」が、国文学界でまことに寥々としている事実に徴して明らかである。

文学研究にあたって作品論、作家論、はたまたそれらの基礎をなす本文批評や注釈が重要なことは、改めて述べるまでもない。同時に世界文学の中での日本文学の特質や位置を把握すること

も、絶対に必要である。ところが、幾多の学会活動を通観するのに、現在こうした巨視的な追求を志しているのは、ひとり日本文学風土学会のみで、他にはない。

日本文学風土学会で考えている「風土」とは、単なる自然環境の謂ではなく、あくまでも人間生活と関連しあっている性格の自然を指している。それゆえ風土は、局地の住民性や一国の国民性の醸成にあずかりもするし、逆にそうした人間の側から自然は特定の規制を受けもする。当初文学の直接素材たり得た名勝佳景が、やがて観念化された歌枕を生むに至るが如きは、その典型と称してよからう。芭蕉が自然への帰一を志したのも、その俳句がいまなおわれわれの心を捉えて離さないのも、芭蕉のいう自然が古来日本人の意識にのぼっていた風土そのものだったからである。東洋人は、欧米人に比べ全般に自然と密着した生活態度や思考をとりがちである。東洋人の中でも日本人は、立地条件からこの傾向が特に著しく、文学への反映のさせかたも大陸の中国人以上に独自性がある。花鳥風月は文学の大きな素材として古代中国に意識されていたけれど、日本人はこれを月雪花つきゆきはなへと昇華させて来た。本書ではこの中の花についてまず考え、併せて若干の理論的考察を掲げたが、今後このような広い視野のもとに国文学の特性を追求していく所存である。

昭和五十年十月六日

長谷章久 識

花と文学

目次

[illegible]

第一章 日本文学と風土

風景と花鳥風月……………久松潜一 9

※ 山紫水明と花鳥風月
※ 月雪花と雨雪風

※桜の美
※菊に想う

文学と風土に関する一考察 …… 長谷 章久 23

——主として四季の扱いについて——

古代風土学の課題……………塚田六郎 56

——祭神伝承による風土地域の分析——

第二章 王朝文学の花

伊勢物語の植物と観念……………森本茂 79

古今和歌集の「花」……………中田武司 96

—その素材と風土観の理解のために—

第三章 近代文学の花

「荷風と花」序説	高橋俊夫	139
川端文学と花	小林一郎	160
信濃の花	小川和佑	183
——立原道造の十四行詩における花をめぐる——		
※詩集『萱草に寄す』命名考	※風土的転位	
※信濃の花の発見	※十四行詩における花の扱い	
※十四行詩三部作における花の位相		
現代詩と花	志村士郎	219
——文芸風土の重層性について——		
※現代詩における「花」	※小野十三郎の場合	
※文芸風土の重層性について		
あとがき	高橋良雄	245

第一章

日本文学と風土

風景と花鳥風月

久松潜一

一 山紫水明と花鳥風月

日頃から風土について関心をもっている。私はかつて日本の風土を山間の風土と水辺の風土とにわけ、水辺の風土を海辺風土と河畔風土と湖畔風土とにわけて見たことがある。水辺風土はこの外に溪谷風土もあげられるし、風土全体からいうと、原野風土や島の風土もあげられるであろう。また風土には美意識と結びついて風景としてうけとられる場合が多い。水辺風土も水辺風景としてうけとられ、海辺風景、河畔風景、湖畔風景となる。

日本ではそういう風土を風景としてうけとる場合、それを表す適当な語彙を多く有している。山紫水明と白砂青松とはその主なるものである。日本の風土は山と水とにわけられると言ったが、山だけでなく、そこに水が背景となり、水には山が背景となっている。山水が風景を表す語にもなっているのはそれである。風景画を山水画というのもそのためである。山紫水明は山は紫色にかすみ、水は明らかというので山間の風景であるが、山に水が点景となっている。これに比

すると白砂青松は海辺の風景を表しているが、そこにも山が点景となって風景は完成するのである。山紫水明というと京都の風景を思出すのは、京都は山国であるが、水が豊富でそのために山にもうるおいが生ずる。山紫というのにふさわしい。京都の庭園に苔が美しいのもそのためである。大和は同じ山間の地域であっても水が乏しいので山紫水明とは言えない。山紫水明にふさわしいのは日本の風土でも京都だけでも知れない。しかし大和の春は明るく長閑で山紫水明とは異なった意味でひきつけられるものがある。

白砂青松というのは砂が白く松が青々としている風景であり、日本の海辺風景にはしばしば見る風景である。三保の松原をはじめ多い。ただ白砂青松の海辺にも山の点景があってはじめて風景として完成する。その点で東海道の海辺には富士山が見事な点景をなしている。田児浦も富士山があって白砂青松の美が完成するのである。赤人の「田児浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高ねに雪はふりける」(一三二八)の歌が白砂青松の典型をなす理由である。また同じ海辺風景でも、日本海の手海風景が断崖絶壁式であると言われるのは、日本海の荒海を背景としてふさわしい言葉である。もとより日本海の手海にしても白砂青松式な海辺はないではない。柿本人麻呂のよんだ石見の海にしても、大伴家持のよんだ越中の海辺にしても白砂青松にふさわしい所がある。人麻呂は「石見の海角の浦みを浦なしと人こそ見らめ瀉なしと人こそ見らめ」(一三二)とうたっている。しかし、人麻呂がかって歩いたところと思うためもあるが、私の歩いたのは十月

の晴れた日で、静かな美しい海辺であると感じた。ただ全体として見れば日本海の海辺は太平洋の海辺の白砂青松とは異なるであろう。もとより断崖絶壁式の海辺も美の一樣式にはなる。芭蕉の「荒海や佐渡に横たふ天の川」はそういう海辺風景を美の様式としてとりあげている。それは蕪村の「春の海ひねもすのたりのかな」とは異なった風景の様式である。

風土の美を表す言葉として山紫水明や白砂青松の外に多くの詞句がある。その場合、季節と結びついた語が多い。雪月花、花鳥風月、飛花落葉、花紅葉など季節と結びついた風景の美を現している。季節と結びつくことは、空間に時間が結びつくことにもなり、そこに風土の無常ということにもなる。

雪月花は花によって春や秋の美しさを表し雪によって冬の季節美を表している。もとより冬と言ってもきびしい寒さを表すよりも花とまちがえられる雪の美を表す。花の散るのを「空に知られぬ雪」が降ると見立てる場合があるが雪の降るのを花の散るのに見立てるのである。花と雪との美の性質は一方が艶麗であるに対して一方は枯淡であるとも言えるので、平安時代では花の美が主としてとりあげられる。しかし中世になると花よりも雪の美を重んずる思想も出てくる。連歌師の心敬は「氷ほど艶なるものはなし」と言って氷に艶を見出しているし、能楽師の世阿弥も花の美よりも雪の美を重んじ、更に「夜半日頭を見る」所謂、無の美を最高のものとしている。

花にも春秋だけでなく夏の花、冬の花もあるが、春、秋の花が美としてとりあげられ、殊に春の

花が代表とされている。そうして秋は紅葉によって表されている。飛花落葉というのも春に桜の花が散り、秋に紅葉が散る意味である。飛花落葉になると自然を通して無常感が表されている。そうして花紅葉というと自然の美を代表している。明治三十年代のはじめに美文という名で美しい文が書かれ塩井雨江、武島又次郎、大町桂月の三氏によって「花紅葉」という美文韻文集が出された。定家の

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のたまの秋の夕ぐれ

の中の、「花も紅葉も」というのも自然の美を花と紅葉とによって表しているのである。月は春夏秋冬にわたっており、季節を越えているようであるが、春の月、夏の月、秋の月、冬の月によってそれぞれ印象が異なっている。春の朧月、秋の澄んだ月、夏のさわやかな月、冬の寒月それぞれに季節の美を表している。

雪月花に対して花鳥風月になると、雪がなくなって、鳥と風とが加わっている。鳥と風とは季節を越えたようで季節とかかわっている。春の鶯、夏の時鳥は季節の象徴である。秋は鳥よりも鹿やきりぎりすが季節を表しているとも言える。秋から冬にかけては雁や鶯が文学の上に現れてくる。

風もまた季節と結びついて美を形成する。春風、夏の風、秋の野分、冬の木枯、それぞれに季節美を形成している。それにしても月や雪や風などはそれに対する感じ方や美意識は昔と今とい

くらか変わってもそれほど大きな変化は無い。花になると時代によって随分変わっている。昔でも梅と桜の隆替があったが、今では花の種類も多くなりそれだけ花の季節による美意識も多様である。

二月雪花と雨雪風

風土が人間生活に及ぼす影響は大きい、一方で生活の中に自然や風土がどう受容されるかということは文学風土の考察の上に重要である。ここでは自然と風土とをほぼ同意義に用いるが、風土には人間の生活にとって欠くべからざる実用的な方向もある。衣食住の上で風土や自然から資源が得られる場合が多い。特に日本人の生活では住居も木造であつたし、食物も自然のものを加工もせずに用いるものが多い。衣服として自然を重んずることは同様である。風土や自然は人間生活に必要な資源である。こういう点とともに自然や風土は生活に於ける美的なものとして受容される。

美として自然美と芸術美とが区別してあげられるのもそれである。自然を美として受容するにも種々の相違がある。日本人が古来、自然の美を月雪花もしくは花鳥風月としてとりあげるのもその一である。風景を山水としてとりあげるのも同様である。山紫水明や白砂青松として自然の美をとりあげるのもそれである。美の類型の上から優美な自然、雄大な自然、静寂な自然としてわ

けて見るのも自然を受容する一つの態度である。もとよりこのような自然を美としてとりあげるのと、生活の資源として実用的に自然をとりあげるのと相違しているとともに共通している点もないではない。

月雪花というとりあげ方と、雨雪風もしくは雨風という取りあげ方は、一方は美として一方は生活の上に苦を与えるものとして扱われている。しかしそこに共通する点がないではない。雪は美として扱われる場合が多いが、風雪などの場合は生活に苦しみを与えるものとして受けとられている。東海地方では雪は美としてとりあげられることが多いが、日本海地方では美としてよりも生活に苦しみを与えると考える場合が多いかも知れない。然し日本海方面だって、雪景色を美しく感ずる場合もないではなからう。

文学の上でもこの点は見られる。憶良の貧窮問答歌の「風雜り雨降る夜の雨雜り雪降る夜はすべもなく寒くしあれば」(八九二)の雪と「新しき年のはじめはいや年に雪踏みならし常かくにもが」(四二二九)とでは雪のとりあげ方が異なっている。

三 桜の美

日本の花と言えば桜をあげるのは古代からである。古事記にある木花之佐久夜毘売は石長比売